

南スーダン 独立から5年

ユニセフ・フォトエッセイ『5歳を迎えて』

1		<p>ガッチャン・モエ（5歳）。 ベンティウ市民保護区にて。 将来の夢を聞かれると、「飛行機のパイロット」と即答した。 ガッチャンが生まれたのは、とても暑い日だったと祖父は語る。ガッチャンがやっと2歳になる頃、紛争が始まって暮らしていた町が破壊された。家族とベンティウの市民保護区に逃れ、以来ずっとこの中で暮らしている。</p> <p>© UNICEF/UNI203954/Everett</p>
2		<p>マダドル・トゥオック（5歳）。 ベンティウ保護区にあるリッチ小学校にて。 「毎日学校に行く前、お母さんがボタンをかけるのを手伝ってくれるんだ」と話し、誇らしげにスーツを見せてくれた。 ここは、ベンティウの市民保護区内でユニセフが運営する8つの学校のうちのひとつ。保護区で暮らす9万人の60%は18歳未満の子どもで、教育のニーズは高い。持っていた食用油の空き缶に話がおよぶと、「イスの代わりに毎日家から持ってきているんだ。前に座れば、ちゃんと先生が見えるよ」</p> <p>© UNICEF/UNI203953/Everett</p>
3		<p>サブリ・ジョン（5歳） マグウィの家の前で。 「このブーツは、ジュバから来たんだ」まだ行ったことのない首都から届いたこの靴が彼の自慢。「ジュバには叔母さんがいるの。病院で働いているよ」サブリの家には、半年前に双子の赤ちゃんが生まれたばかり。母親のローズは言う。「いまは学校に行かせるお金がありません。でも赤ちゃんたちがもう少し大きくなったら仕事に戻って、サブリを学校に行かせてあげたい。何でもできる子なんです。いい子なの、わかるでしょう？」</p> <p>© UNICEF/UNI203955/Everett</p>

4		<p>アベール・ベアトリス（5歳）と母親のイーダ。イーダが切り盛りするマグリのレストランにて。</p> <p>「大きくなったら、お医者さんになって、マグリの人たちを助けたい」アベールの父は、独立紛争時に逃れていたウガンダの難民キャンプでイーダと知り合った。独立直前に南スーダンに戻りアベールが生まれた。イーダは、この小さなレストランからの稼ぎでアベールを学校に通わせている。高校を卒業し、できることなら大学に行ってほしいと願っている。</p> <p>© UNICEF/UNI203951/Everett</p>
5		<p>スーザン・アンデュア（5歳）ニムレにある母フローレンスの家の前で。</p> <p>「あるとき、スーザンは先生に、なにが飛行機を空で動かしているのか聞いたそうなのです。先生が、学校でたくさん勉強した人たちが動かしているのだと教えてくれて、彼女はパイロットになると決めたのです」とフローレンスは話します。</p> <p>南スーダンで、小学校を卒業できる女の子は10%程度。農村部では、多くの少女が15歳までに結婚します。高校を卒業する少女よりも、出産で命を落とす子のほうが多いのです。</p> <p>© UNICEF/UNI203956/Everett</p>
6		<p>エレクション・ロワタ（5歳）ウガンダ、ロモロ村にある一時受け入れ所にて。</p> <p>「すべり台、はじめてなの！でも楽しい！」エレクションはまた順番の列に並ぶために走りながら言いました。独立の都市に生まれた彼女に、両親は誇りを持って“エレクション(選挙)”という名前を付けました。しかし、この2年間不作が続き、対立する部族に家畜を奪われることが続いた一家は、ウガンダに逃れることを決めました。ウガンダに着いて迎えた最初の朝、エレクションはユニセフが支援する子どものための遊びと学習のスペースに来て、さっそく手をあげて質問に答えていました。「エレクションはきっと毎日ここに来るよ」父親ははじめて笑顔を見せました。</p> <p>© UNICEF/UNI203958/Everett</p>